

文化財に恩送り

賛助会員 京都・宮川 義史

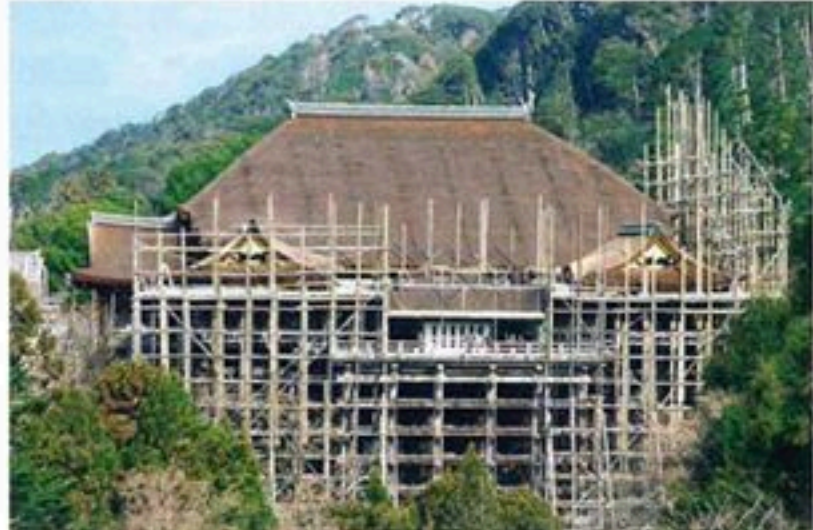
家業を継いで24年が経ちました。丁度人生の半分を檜皮葺・柿葺屋根工事に携わってきたことになります。長かったようで、あっという間で…。

初めは声を掛けていただいた現場を葺き上げることに必死で、必要な材料・職人の確保に奔走していました。今思えば羨ましいことですが、若かったので思ったことを行動に移すのが躊躇無く出来ていたように思います。「良質な檜皮が確保できない」「若い子が入っても続かない」「現場が無い」「資金が不足する」等々、まあ次々と問題が起こってきます。一つ山を乗り越えたと思っても、気が付けば迷走している。今でもまだその繰り返しです。ただ乗り越えてきた経験が自信となり、縁あって出会ってきた人たちとの繋がりが大きな財産となっています。

選定保存技術の保存団体である（公社）全国社寺等屋根工事技術保存会では、諸先輩方の御尽力により、文化財屋根葺士養成研修が昭和49年から開始され、現況180名ほどの技術者が現場で活躍しています。私もその運営をお手伝いする側になって、若い人たちを指導することや1～2時間講義をするために準備からどれだけ手間がかかるか、その大変さを痛感しています。立場が変わって初めて見えてくることに戸惑い、どうしてもやらなければならない問題の多さに自分自身の中で思いが葛藤しています。そんな中、若い時には考えもしなかったことですが、最近になってふと思うようになりました。

私的にお世話になった人への恩返しや自社の職人だけが育てば良いのではなく、会として「次世代にこの技術を継承していく」という強い信念を持って取り組むことが出来ているか？それが大切なことで、苦勞してこられた先輩方の思いを次に繋げていけるよう努めていきたいと思っています。

約半世紀ぶりに屋根葺替工事で清水寺本堂は平成29年から丸太足場に覆われました。約3ヶ年の時を経て、新しい檜皮葺屋根が姿を現してきました。



保存修理時の国宝 清水寺本堂

今回の工事で、本宇においては皮の長さも通常より長い3尺2寸、厚みも7厘と前回の仕様と異なるため、総葺厚が変わってきます。現場責任者となった職人は、仕上がりの曲線を逆算し、試行錯誤を繰り返しながらまさしく全身全霊をこの屋根に捧げて取り組んでくれました。また、多くの同業者の方々、大工さんを始め各職種の方々に御協力いただき、無事完了に至りました。この歳で約600坪もある大きな屋根に携わることできたことは冥利につき、大きな経験となりました。次回の葺替は、大きな災害が無い限りおそらく60年以上後になり、今回携わった職人は誰も現役ではないと思います。ボタン一つ押せば答が出てくる便利な時代になり、この葺替も動画でしっかり残せば次の時に役立つと思っていました。でも、職人がどう納めたらよいか悩み、試行錯誤している姿を見ているうちに考えが変わりました。こういう仕事だからこそ、次に取り組む職人が前回の施工方法に縛られるのではなく、古く朽ちた檜皮を取り解き、皮の状況と野地の納まりを見極めながらより長持ちする美しい曲線を追求していくはずで、そうやって技術は継承されていくんだと…。

京都を中心に名だたる社寺の屋根工事に従事させていただき、その葺替した屋根を沢山の方々に見ていただける本当に誇りのある仕事だと思っています。ただ、檜皮葺、柿葺の屋根は自然からの生きた素材を使っている以上、寿命が来てしまいます。安い物ではありませんので、所有者の皆様にとってもかなりの負担になっているとよく耳にするようになりました。残された限りある時間の中で、「誰のために?」「何のために?」仕事をしているのかを再考しながらこの課題に真摯に向き合っていきたいと思います。